『赤い少女』

　時代の変わり目にはコンベンション（約束ごと）を破るものが現われる。もしくはそういうものが現われたとき、我々は時代の変化に気付くものだ。inriの写真はそのような変化を引き起こす引きがねである。inriが生み出した赤い絵の具を浴びる少女の写真群は、行き詰まった感のある今の日本人にコンベンションを破るように挑発するのである。

　inriは少女に赤い絵の具を与えた。少女ははじめは控えめだったが、やがて徐々に大胆になり、赤い絵の具を部屋に撒き始める。床も壁も赤い色に染まっていく。少女は自分自身の服をも赤く染めながら部屋中を暴れまわる。赤い色は少女の理性を麻痺させ、感情は自由奔放に爆発と沈静のあいだをさまよいながら高揚していく。やがて少女は自己を抑制する力を失う。少女は理性の及ばぬトランス状態に入った。

　少女はときおり向こう側からこちらのほうに視線を向けるのだが、それはこちらを見ているわけではない。コンベンションにからめとられたこの世界などもう眼中にないのだ。少女が見ているのは、我々が見ていないものである。

　その目の奥には凄味がたたえられている。それは獣のような鋭い視線だが、獣のそれとは明らかに異なる。獣には、おそらく自然の与えた行動の規範がある。例え野獣が狂ったように暴れたとしても、そこには生存という規範があるにちがいない。もっともそれは本能と呼ぶべきものであり、人間の理性とは異なる。野獣には失うべき理性がないのだ。人間にのみ理性が与えられているとしたら、人間のみにその理性を失うことが可能であるということになるだろう。その理性を失った時の視線は人間だけのものだ。

　デカルトは近代的人間とは理性によって行動する人間であるとした。理性は人間を集団的な無意識から解放し、自律する人間を作り出した。自我を得た人間は自由となった。理性のはたらきはそれだけではない。人間は理性によって宇宙を理解し、さらには宇宙に介入しようとしてきた。人間がこの宇宙を自由にコントロールすることができると思うようになったのも理性のなせる業である。たとえばクローンの製造、遺伝子組み替えは科学つまり理性の勝利だ。理性はかつて全知全能の神が占めていた場所にいる。

　しかし、我々は今、その理性に恐怖を抱いている。なぜならば我々は理性が全知全能でないことを知っているからである。自由は人間を自由でないことの恐怖から解放したが自由であることの牢獄に入れてしまった。そこではサルトルが言ったように、他人が地獄なのである。そしてまた、人間は宇宙をコントロールすることなどできないのだ、と多くのものが気付いている。人間は人間自身すらコントロールできないのだ。まして遺伝子を操作するなど危険きわまりない。しかし、人間はそれをやってしまう。理性を用いることに理性的でない。

赤い少女の視線は、別の地平が存在することを示している。理性だけがすべてを律するのではない場所である。しかしそれは理性の対局にあるわけではない。理性に対抗するパラダイスがそこにあると仮定するのは誤りである。inriが我々に見せようとしている場所は、なにか完成された場所としてあるのではないだろう。少女の視線のなかに我々は安閑として住むことはできないのである。

inriがあらわにした場所は日常の裂け目である。それは理性を非理性的につかってしまう人間に、そのことを知らしめるための深淵である。

過去10年に日本に現われた写真少女たちが俳句のように日常を写し出している。彼女たちは、同世代のものたちの表情、友人、街の風景などここちよい周囲の情景を感性豊かに表現する。それはこの世界の善と悪をすべて受け入れることで、人間の営みを超越した宇宙そのものに至る方法であるかもしれない。それに対してinriのアプローチは全く異なる。inriは禅の公案のごとく不透明で曖昧な状況をつくりだし、我々につきつけるのだ。周囲の状況を受け止め自分で解釈するのではなく、周囲の状況にはたらきかけ、そこに裂け目を見い出し、状況を満たす空気を変質させてしまう。

激しい少女の視線はもとより新しいコンベンションを提案するものではない。しかしそれは確実にコンベンションを破壊する力を秘めている。新しいコンベンションを作るのはこちら側にいるものの役割である。

清水敏男（インデペンデントキュレーター）